

(11) 薄肉断面直線材のせん断変形解析

秋田大学 土木工学科 正員 柳農 知徳
 秋田大学 土木工学科 正員 薄木 征三
 秋田大学 土木工学科 学生員 ○ 福田 隆

1. まえがき 薄肉断面直線材の曲げに伴うせん断応力によるせん断変形解析を行う。曲げに伴うせん断応力による変形の影響は Timoshenko's Beam Theory にみられるように静力学的、動力学的に研究されている。この Timoshenko によればせん断力 Q によるたわみ曲線の勾配 $\frac{dw}{dx}$ は近似的に中立軸におけるせん断ひずみに等しいとおき $\frac{dw}{dx} = \gamma_s = \frac{\alpha_s Q}{GA}$ としている。ここに Q/A はせん断力をはりの断面積で除して得られる平均せん断応力、 α_s は断面の圆心におけるせん断応力を得るために平均せん断応力にかけねばならない係数 $\alpha_s = SA/Ib$ すなわちせん断係数である。このせん断係数ははりの中立軸におけるせん断応力と平均せん断応力との比 (たとえば長方形断面の場合 $\alpha_s = \frac{3}{2}$) に等しい。すなわち中立軸におけるせん断ひずみを基礎にしておき、はりの高さにわたってせん断ひずみが変化していることを考慮していない。一方、たわみは純粋曲げの場合に対して導いた曲げ理論を基礎にしているから近似的なものにとまわっている。これについては G. R. Cowper が 3次元弾性論に基づいたより厳密な方法によって Timoshenko's Beam Theory のせん断係数を導いている。これによると静的なたわみについては Timoshenko の値よりも小さい値を得ている。本論文は薄肉断面直線材の基礎的解析において断面不変の仮定を保持したうえで、ひずみ変位場を明確にしてせん断ひずみの影響を考慮することを試みたものであるが、この場合ひずみ成分に対してせん断変形の影響を補正する形を附加されるものとした。ひずみ成分が求められると、仮想仕事の原理により基礎式が得られる。ここでは薄肉断面直線材の曲げに伴うせん断応力によるせん断変形の影響を求め Timoshenko, Cowper の値と比較したものである。基礎式としては変位関数を 5 次のべき級数に近似して仮想仕事の原理を用いて剛性マトリックスを求めることにより得られる。

2. 変位とひずみ成分 解析上の仮定は 1) 断面不変 2) 薄板要素の板厚中心面に垂直な部材軸線に平行な面でのせん断ひずみは無視する。などである。座標系は原点を D とする右手系座標 $D-x, y, z$ と断面の板厚中心面上の任意の点 C を原点とする直交曲線座標 (S, n, z) を用いる。断面上の任意の点 $P(x, y, z)$ の変位 $(\bar{u}, \bar{v}, \bar{w})$ とひずみ成分との関係は、
$$E_x = \frac{\partial \bar{u}}{\partial x}, E_y = \frac{\partial \bar{v}}{\partial y}, E_z = \frac{\partial \bar{w}}{\partial z}, \quad \bar{\nu}_{xy} = \frac{\partial \bar{u}}{\partial y} + \frac{\partial \bar{v}}{\partial x}, \quad \bar{\nu}_{yz} = \frac{\partial \bar{v}}{\partial z} + \frac{\partial \bar{w}}{\partial y}, \quad \bar{\nu}_{zx} = \frac{\partial \bar{w}}{\partial z} + \frac{\partial \bar{u}}{\partial x} \quad \dots (1)$$
 仮定 1) より $E_x = 0, E_y = 0, \bar{\nu}_{xy} = 0 \dots (2)$ 式 (2) より剛体変位が求められる。 $\bar{u} = u - y\phi$, $\bar{v} = v + x\phi \dots (3)$ u は点 D の変位であり ϕ は点 D の回転変位である。変位 \bar{w} を求めるために直交曲線座標 (S, n, z) を用いて任意の点 P のせん断ひずみ $\bar{\nu}_{yz}$ および $\bar{\nu}_{zx}$ を求める。 $\bar{\nu}_{yz} = m\bar{\nu}_{z2} + l\bar{\nu}_{z1}$, $\bar{\nu}_{zx} = -l\bar{\nu}_{z2} + m\bar{\nu}_{z1}$ (l, m は方向余弦) であるが、式 (1)(3) より $\bar{\nu}_{z2} = \frac{\partial \bar{w}}{\partial z} + v' \frac{\partial \bar{v}}{\partial z} + u' \frac{\partial \bar{u}}{\partial z} + \bar{\nu}_0 \phi'$, $\bar{\nu}_{z1} = \frac{\partial \bar{w}}{\partial z} + v' \frac{\partial \bar{v}}{\partial z} + u' \frac{\partial \bar{u}}{\partial z} + \bar{\nu}_0 \phi' \dots (4)_{a-b}$ ここで $\bar{\nu}_0 = mx - lz$, $\bar{\nu}_1 = -lx - m\phi$ 仮定 2) により $\bar{\nu}_{z2} = 0$ とすることができるとして式 (4) b を n について積分して、 $\bar{w} = C_1(z) - v'\phi - u'x - \bar{\nu}_1 n \phi'$ $\dots (5)$ $C_1(z)$ は積分定数。任意の点 P における微小要素を考慮、 z 軸方向の力の釣り合い条件は、板厚を t とすれば、
$$\frac{\partial(C_1(z)t)}{\partial z} + \frac{\partial(C_2(z)t)}{\partial z} = 0 \dots (6)$$
 式 (6) を変形して積分すると $C_1(z) = \frac{S_1}{Gt} - \frac{1}{Gt} \int_{S_1}^S \bar{\nu}_0 (0z) ds \dots (7)$ S_1 は積分定数で $S = S_1$ での (Gt) の値である。式 (7) において $\bar{\nu}_0$ はまだ定まらず、この値を $\bar{\nu}_0 = 0$ と仮定する。すなわち \bar{w} が定まり、 $\bar{\nu}_{z2}$ が与えられると再び式 (4) a に戻って修正することにするわけである。従って式 (4) は $\bar{\nu}_{z2}^* = \frac{\partial \bar{w}}{\partial z} \dots (8)$ 式 (4) a と (8) から $\frac{\partial \bar{w}}{\partial z} = \frac{\bar{\nu}_1}{Gt} - v' \frac{\partial \bar{v}}{\partial z} - u' \frac{\partial \bar{u}}{\partial z} - \bar{\nu}_0 \phi' \dots (9)$ 変位の連続条件 $\int_{S_1}^S \frac{\partial \bar{w}}{\partial z} ds = 0$ から $\bar{\nu}_1 = G\phi' \int_{S_1}^S \bar{\nu}_0 ds / \int_{S_1}^S ds \dots (10)$ 式 (5) において $n = 0$ の値を求めると $\bar{w}^* = C_1(z) - v'\phi - u'x \dots (11)$ これを式 (9) に代入すると $C_1(z) = \int_{S_1}^S \frac{\bar{\nu}_1}{Gt} ds - \int_{S_1}^S \bar{\nu}_0 ds \phi' + C_2(z)$

$C_2(z)$ は積分定数である。結局式(5)は $\bar{w} = -v'y - u'x - (\Omega + \nu n) \varphi' + C_2(z) \dots (12)a-b$

$\Omega = \int_0^l (1 - \int_0^s \nu^* ds / t) \frac{d\Omega}{ds} ds$ 。そして仮想薄板($t=0$)理論よりD点での変位を w とすると、

$C_2(z) = w + \int_0^l \nu^* ds \varphi' \dots (13)$ 従って式(12)は $\bar{w} = w - v'y - u'x - w \varphi'$ $\dots (14)$

$w = \Omega + \nu n - \int_0^l \nu^* ds$ であり体積が零になるように選ぶと、 $\int_F w dF = 0$ であるから $\int_0^l \nu^* ds = \frac{1}{F} \int_F (\Omega + \nu n) dF$

故に $w = \Omega + \nu n - \frac{1}{F} \int_F (\Omega + \nu n) dF \dots (15)$ となる。 \bar{w} が決定したのでひずみ成分は次のようになる。

$\varepsilon_x = w' - y v'' - x u'' - w \varphi''$, $\nu_{xz} = \theta \varphi'$, $\theta = \int \nu^* ds / t \frac{d\theta}{ds} - 2n \dots (16)a-c$

式(16)により $\sigma_x (= E \varepsilon_x)$ が求められるので式(7)に戻して修正すると $\nu_{xz} = \frac{\theta_1}{Gx} - \frac{E}{Gx} \int_{s_1}^s (w'' - y v'' - x u'' - w \varphi'') t ds$

$\dots (17)$ 以下全く同じ過程により、次のようにひずみ成分が求められる。その他のひずみ成分は零である。

$\varepsilon_x = w' - y v'' - x u'' - w \varphi'' - \frac{E}{G} (B_y w'' - B_x v'' - B_y u'' - B_w \varphi'')$ } (18) 式中Bおよび θ はたとえば
 $\nu_{xz} = \theta \varphi' - \frac{E}{Gx} (S_y w'' - S_x v'' - S_y u'' - S_w \varphi'')$ }
 $S_y = \int_{s_1}^s x t ds$, $S_x = \int_{s_1}^s x t ds$
 $\theta_1 = \int \frac{d\theta}{ds} ds / \int \frac{d\theta}{ds} ds$, $B_y = \int_{s_1}^s \frac{d\nu^*}{ds} ds$ である

3. 薄肉直線曲げ部材の剛性マトリックス 任意原点Dを図1のCにとって変位 u を5次のべき級数で近似する。

$u(z) = H(z) \{a\}$, $\{a\} = [a_0, a_1, a_2, a_3, a_4, a_5]^T$, $H(z) = [1, z, z^2, z^3, z^4, z^5] \dots (19)$

有限要素法の周知の手法を式(18)の $u(z)$ に関する項のみに用いれば、次のように剛性マトリックスが求められる。

$\{P\} = [K] \{u\}$ $\{P\} = [Q_{xi}, M_{yi}, Q_{xj}, M_{yj}, H_{yi}, H_{yj}]^T$ $\{u\} = [u_{xi}, \beta_{yi}, u_{xj}, \beta_{yj}, \chi_{yi}, \chi_{yj}]^T \dots (20)a-c$

$[K]$ は 6×6 の対称マトリックスであり各要素は、

$K_{11} = \frac{120}{7l^3} EJ_y + \frac{1440}{l^5} E_y H_{yy} + \frac{720}{l^5} E_y D_{yy}$, $K_{13} = -K_{11}$
 $K_{12} = \frac{60}{7l^2} EJ_y + \frac{720}{l^2} E_y H_{yy} + \frac{360}{l^2} E_y D_{yy}$, $K_{14} = K_{12}$, $K_{15} = \frac{3}{7l} EJ_y + \frac{60}{l^3} E_y H_{yy} + \frac{60}{l^3} E_y D_{yy}$, $K_{16} = -K_{15}$
 $K_{22} = \frac{192}{35l} EJ_y + \frac{384}{l^3} E_y H_{yy} + \frac{192}{l^3} E_y D_{yy}$, $K_{23} = -K_{12}$, $K_{24} = \frac{108}{35l} EJ_y + \frac{336}{l^3} E_y H_{yy} + \frac{168}{l^3} E_y D_{yy}$, $K_{33} = K_{11}$
 $K_{25} = \frac{11}{35} EJ_y + \frac{36}{l^2} E_y H_{yy} + \frac{36}{l^2} E_y D_{yy}$, $K_{26} = -\frac{4}{35} EJ_y - \frac{24}{l^2} E_y H_{yy} - \frac{24}{l^2} E_y D_{yy}$, $K_{34} = -K_{12}$,
 $K_{35} = -K_{15}$, $K_{36} = K_{16}$ $K_{44} = \frac{192}{35l} EJ_y + \frac{384}{l^3} E_y H_{yy} + \frac{192}{l^3} E_y D_{yy}$, $K_{45} = -K_{26}$, $K_{46} = -K_{25}$
 $K_{55} = \frac{32}{35} EJ_y + \frac{4}{l} E_y D_{yy}$ $K_{56} = \frac{0}{70} EJ_y - \frac{3}{l} E_y D_{yy}$, $K_{66} = K_{55}$

ここで $J_y = \int_F x^2 dF$, $D_{yy} = \int_F \frac{x^2}{t} dF$, $H_{yy} = \int_F B_y x dF$, $E_y = E^2/G$

式(20)aを分割マトリックスで表示すると、

$\{P\} = \begin{Bmatrix} P_x \\ P_y \end{Bmatrix} = \begin{bmatrix} K_{\alpha\alpha} & K_{\alpha\beta} \\ K_{\beta\alpha} & K_{\beta\beta} \end{bmatrix} \begin{Bmatrix} \{u_\alpha\} \\ \{u_\beta\} \end{Bmatrix} \dots (22)$ ここで $\{P_\alpha\} = [Q_{xi}, M_{yi}, Q_{xj}, M_{yj}]^T$, $\{P_\beta\} = [H_{yi}, H_{yj}]^T = 0$
 $\{u_\alpha\} = [u_{xi}, \beta_{yi}, u_{xj}, \beta_{yj}]^T$ $\{u_\beta\} = [\chi_{yi}, \chi_{yj}]^T$

式(22)より $\{u_\beta\} = [K_{\beta\beta}]^{-1} [K_{\beta\alpha}] \{u_\alpha\}$, $\{P_\alpha\} = [K_{\alpha\alpha}] \{u_\alpha\} + [K_{\alpha\beta}] \{u_\beta\} = [K_{\alpha\alpha} - [K_{\alpha\beta}] [K_{\beta\beta}]^{-1} [K_{\beta\alpha}]] \{u_\alpha\} \dots (23)$

4. 計算例 1端固定他端自由の矩形はりを対象として解析する。断面値は次の通りである。

$J_y = \frac{h^3}{12}$, $D_{yy} = \frac{2h^5}{120}$, $H_{yy} = -\frac{2h^5}{120}$, $E/G = 2.6$, $h/l = 1/10$ 本論文の場合は1要素近似で計算する。

式(23)を用いて自由端の変位を求めると、 $u_{x1} = \beta_{y1} = 0$ として式(20)aを用いてさらに $\chi_{y2} = 0$ なる拘束条件を追加すると、

$\begin{Bmatrix} u_{x2} \\ \beta_{y2} \end{Bmatrix} = \frac{10^3}{h^2 t E} \begin{bmatrix} 4.03912 h^2 & 0.60255 h \\ 0.60255 h & 0.12051 \end{bmatrix} \begin{Bmatrix} Q_{x2} \\ M_{y2} \end{Bmatrix} \dots (a)$ $\begin{Bmatrix} u_{x2} \\ \beta_{y2} \\ \chi_{y2} \end{Bmatrix} = \frac{10^3}{h^2 t E} \begin{bmatrix} 4.0325 h^2 & 0.5955 h & 0.0960 \\ & 0.1126 & 0.0116 \\ \text{Symm.} & & 0.0136 \frac{h}{l} \end{bmatrix} \begin{Bmatrix} Q_{x2} \\ M_{y2} \\ H_{y1} \end{Bmatrix} \dots (b)$

はりの断面形状と載荷状態	Cowper		Timoshenko	本	表
	せん断係数	たわみ	式(a)	式(b)	式(b)
	1.18	$\eta = \frac{P l^3}{3 E J_y} (1 + \frac{3 \alpha E J_y}{A G l^2})$ $= \frac{P}{t E} \times 4.0307 \times 10^3$	$\eta = \frac{P l^3}{3 E J_y} (1 + \frac{3 \alpha E J_y}{A G l^2})$ $= \frac{P}{t E} \times 4.0270 \times 10^3$	$\frac{P}{t E} \times 4.0391 \times 10^3$	$\frac{P}{t E} \times 4.0325 \times 10^3$
Cowperに対する誤差	—	—	0.21%	0.21%	0.04%

この結果から1端固定他端自由の矩形はりの自由端に集中荷重が作用する場合における者とよく一致している。

文献) G.R. Cowper "The Shear Coefficient in Timoshenko's Beam Theory", Jour. Applied Mechanics 1966 June.